
緊張する「周縁」

「北アイルランド問題」におけるナショナル・アイデンティティ

“The Margin” under Stress :

Northern Ireland problem and national identity

尹慧瑛*

YOON Hae Young

キーワード: ナショナル・アイデンティティ, 紛争, イデオロギー的転換, 連続性/非連続性, 国民国家の「周縁」

KEY WORDS: national identity, conflict, ideological shift, continuity/discontinuity, “the margin” of nation-states

Though the ‘Irish Question’ and ‘Northern Ireland problem’ are often considered interchangeable terms in Japan, they have clearly different dimensions. The purpose of this article is to examine what possibilities Northern Ireland have in relation to the question of national identity, through a survey of various frameworks in which Northern Ireland problem has been researched.

The conflict in Northern Ireland began in the late 1960s, in a situation where the majority of Protestants are “unionists” and the majority of Catholics are “nationalists”. Violence tied with nationalism made the situation in Northern Ireland highly tense and the conflict had a great impact on the national identity of the people both Northern Ireland and the Republic of Ireland.

The conflict promoted an explosion of research, and it also changed the framework of the study of Northern Ireland problem. Traditional nationalist (Britain versus Ireland), traditional unionist (southern Ireland versus northern Ireland) and Marxist (capitalist versus worker) interpretations revealed their limits under the pressures of “the troubles”, and the internal conflict interpretation (Protestant versus Catholic in Northern Ireland) has become the dominant paradigm since the 1980s.

According to this ideological shift, the continuities and discontinuities between the ‘Irish Question’ and the ‘Northern Ireland problem’ can be defined as follows. Though both originate from English/British colonial rule over Ireland, the Northern Ireland problem can not be seen as a problem that will be solved by one nation’s ‘self-determination’, while the ‘Irish Question’ premised a binary framework (Ireland versus England/Britain) in which Home rule or independence were the goal. In this way, the study of Northern Ireland as “the margin under stress” will bring great profit to examine limits and persistence of national identity.

*一橋大学大学院社会学研究科博士課程 Doctoral Student, Hitotsubashi University

はじめに

日本では、「アイルランド問題」と「北アイルランド問題」とが混同して用いられることが多い。しかし、両者はともにイングランド／ブリテンのアイルランド植民地支配という歴史的起源を背景に持ちながらも、異なる様相を含んでいる。両者の違いはひとまず次のような問題の転換としてとらえることができるだろう。すなわち、「アイルランド問題」がイングランド／ブリテンとアイルランドの支配－被支配の関係を問題にするのに対し、「北アイルランド問題」は、北アイルランド紛争という背景の下に、むしろ北アイルランド内部における宗派等にもとづいたコミュニティ間の関係を問題にするという点である。本稿の目的は、ナショナル・アイデンティティの観点からこの「アイルランド問題」と「北アイルランド問題」のあいだの^ずれに注目し、北アイルランド研究の枠組みの考察を通じて、北アイルランドという「場」がいかなる問題設定の可能性を持っているのかを考えることにある。

北アイルランドという「場」を以上のような観点から扱いたいと考える背景には、近年のいわゆる「国民国家論」におけるナショナル・アイデンティティをめぐる議論への関心と違和感があることを最初に述べておきたい。国民国家論は、国民国家の単一性・均質性・正当性に疑いを向け、その形成過程やそこでの排除や包摂という問題を分析することで、これまで自明なものともみなされてきた国民国家のありようをさまざまに相対化してきた。しかし、このことは私たちを取り巻く支配－被支配の構造や

それと結びついたナショナル・アイデンティティがすぐさま消滅することを意味しない。国民国家という強固なシステムにおいて、ナショナル・アイデンティティは、依然として私たちを世界に位置づける基軸として支配的な位置を占めており、根強い差別や抑圧の状況は、人びとをすぐさま支配－被支配の構造のなかへと引き戻してしまう。国民国家の「脱構築」は、こうした現実における根強い支配－被支配の構造と切り結びながら考えられなければならない。そして、「ナショナル・アイデンティティを乗り越える」といった主張をめぐる言説は、誰がどのような位置から、何に向けて語るのかによって大きく意味合いが異なってくる。

みずからのナショナル・アイデンティティが自明であるかのようにみえる人びとにとっては、ナショナル・アイデンティティは、それが^本当に^自明^である^のかという問いを素通りして、さまざまな制度や言説によって支えられる「保証された」ものとなる。そして、この保証があるからこそ、なんら不都合を感じることなく、また、ナショナル・アイデンティティなど取るに足らない、簡単に乗り越えられるものであるかのように錯覚してしまう。こうした状況においては、ナショナル・アイデンティティをめぐる問題やその意味は、非常に見えにくいものとなるだろう。

一方で、みずからのナショナル・アイデンティティが決して自明なものではありえず、また、それゆえに、ナショナル・アイデンティティの獲得と保証が、緊張をともなった日常の問題である人びとにとっては、そうした諸問題は常に切実なものとして立

ち現れる。私たちはなぜナショナルな支配—被支配の呪縛から簡単に逃れ得ないのか。そして、私たちにとってナショナル・アイデンティティとはいかなる意味を持つものなのか。このような問いについて考えることは、国民国家の批判的考察を行ううえで不可欠な課題であろう。

本稿では、このような問いを考えるためのひとつの「場」として、北アイルランドに注目する。そもそも、ナショナル・アイデンティティがまったく自明なものであり、またそれが完全に保証されているということなどありえないが、それが先鋭的にあらわれている一つの「場」が、北アイルランド紛争という緊張状態に置かれ続けた国民国家の「周縁」、北アイルランドなのである。

I. 北アイルランド問題と北アイルランド紛争

1. 北アイルランド問題の背景

北アイルランド (Northern Ireland) は、ブリテン島の海を挟んだ西側にあるアイルランド島北部に位置するが、行政的には連合王国の一部に組み込まれたイギリス領である。こうした地理的状況は、北アイルランドがかつてのアイルランドとイギリスの植民地関係による歴史的所産であったことを物語っている。数世紀にわたってイング

ランド／ブリテンの支配下にあったアイルランドは、19世紀におけるさまざまな抵抗運動や自治運動、20世紀初めの独立戦争などを経て1922年に自治領として独立を達成するが、その際、プロテスタント系住民*1が多数を占めていたアルスター (Ulster)*2地方の大部分が「北アイルランド」としてイギリス領にとどまることとなった。これが今日「北アイルランド問題」とよばれるものの起源である。

こうした歴史的背景を持つ北アイルランドは、その内部に対立するふたつのコミュニティを抱えているといわれる。北アイルランド社会を「分断」するこれらのコミュニティをどのように名付けるかは、何を焦点にするかによって異なってくるだろう*3。本稿では、しばしばマスメディアの報道にありがちな「宗教戦争」としての見方を避けるためにも、政治的用語である「ナショナリスト」「ユニオニスト」という区分を主として用いる。

北アイルランドの帰属をめぐる、先住のカトリック住民の多くはイギリスからの分離・アイルランド島全島の完全独立を主張する「ナショナリスト」であり、入植者の子孫であるプロテスタント住民の多くはイギリスとの連合維持を望む「ユニオニスト」であるとされる。しばしばカトリック／プロテスタントという区分はナショナ

* 1 ひとくちにプロテスタントといっても、アイルランド国教会 (Church of Ireland)、プレズビテリアン、クエーカー、ユグノーなどの諸宗派があり、これらはアイルランドの歴史において常に一枚岩であったわけではない。

* 2 アイルランド北部を指す伝統的な名称であり、アイルランド島の32州のうち、北部の9州に相当する。現在の北アイルランドはそのうちの6州から成る。

* 3 例えば、宗派にもとづいたカトリック／プロテスタント、政治的立場にもとづいたナショナリスト／ユニオニストというラベリングの他に、Ulster Irish / Ulster British, Irishman / Ulsterman などがある。しかし、これらの用語はすべて互換可能なわけではない [Whyte 1990: 18-9]。

リスト／ユニオニストという政治的要求による区分と同義であるかのように見なされるが、両者は必ずしもイコールで結べるものではない。しかし、両者があたかも同義であるかのように見なされ、互いに対立させられることこそが、北アイルランドにおける事態を硬直化させてきた原因のひとつであったといえるだろう*4。こうした緊張をともなう状況においては、ある地理的な実体に対してどのような名称を用いるかということも、すぐさま政治的な問題に直結する [Arthur and Jeffery 1988: 3]*5。

1920年代初めに成立した北アイルランドは独自の議会と行政府をそなえていたが、この北アイルランドにおける自治は、1972年のイギリスの直接統治にいたるまで、一貫してユニオニストの支配体制の下におかれてきた。一党独裁の政府の目的は、北アイルランド人口の約3分の2を占めるプロテスタント住民の支配的位置の確立であり、そのために有利な諸制度が設けられた*6。「北アイルランド問題」は、宗派・経済・政治・心理的側面などいくつもの問題を内包

しており、他の側面を軽視することはできないものの、どこに焦点をあてるかによって切り口も異なってくる。この複雑に絡み合った諸関係を背景とした対立は、1960年代末のカトリック住民を中心とした公民権運動をきっかけに、準軍事組織やイギリス軍などを中心とした北アイルランド紛争へと発展し、北アイルランドはさまざまなイシューが緊張をともなう交錯する「現場」となったのである。

2. 北アイルランド紛争のインパクト

紛争の長期化によって顕在化した暴力とナショナリズムの問題は、北アイルランドが抱えていた諸問題を先鋭化させたばかりでなく、アイルランド共和国*7にも大きな影響を与えた。その代表的なものが、アイルランドにおける修正主義論争 (revisionist controversy) である*8。

それまでのアイルランド共和国で支配的な位置を占めていた歴史観は、「ナショナリスト史観」とよばれるものであった。これは、アイルランドの歴史を「イングラン

-
- * 4 こうした「カトリック対プロテスタント」「ナショナリスト対ユニオニスト」などの対立がクローズアップされることにより、北アイルランドにおける他の宗教的マイノリティおよびエスニック・マイノリティの存在と彼らに対する社会的差別の実状が見落とされてしまうことも指摘しておきたい。北アイルランドにおけるエスニック・マイノリティについては、Hainsworth [1998] がある。
- * 5 「北アイルランド (Northern Ireland)」を指すものとしては、カトリック／ナショナリストが好む「6州 (six-county)」に対して、プロテスタント／ユニオニストが好む「アルスター (Ulster)」, 地名として「デリー (Derry)」に対する「ロンドンデリー (Londonderry)」, Britain と Ireland が属する列島の名称として、'these islands' に対する 'British Isles' など、それぞれにナショナリスト／ユニオニストの歴史認識およびナショナル・アイデンティティが反映されている。
- * 6 例えば、地方議会でのプロテスタント支配の維持を目的とした、比例代表制の廃止、選挙権の制限、複数選挙権、選挙区のゲリマンダリング (特定政党に有利なように特別に選挙区を区割りすること) や、北アイルランド政府の内務大臣とアルスター警察に強大な権限を与えた特別権限法の制定などである。
- * 7 1922年に南部の26州により成立した「アイルランド自由国」は、1937年に制定された憲法で国名を「アイルランド」とし、1949年に英連邦を脱退して正式に「アイルランド共和国」となった。
- * 8 本稿では、北アイルランド紛争との関わりという観点から修正主義を扱ったが、修正主義の社会的背景およびより詳細な議論は、Brady [1994], Boyce & O'Day [1996], 勝田 [1998], 高神 [1998] を参照のこと。また、アイルランドにおける修正主義の限界と可能性をサバルタン研究との関わりで論じたものに、叫 [2000] がある。

ド／ブリテンの支配に対するアイルランド（人民）の抵抗・闘争の歴史」と定義したうえで、前者を「望まれざる悪」、後者を「正義」とみなすものであり、世紀転換期にアイルランドが議会主義的自治運動に代わって分離独立への運動に傾斜していくなかで根付いていった歴史認識であった〔勝田 1998: 80-81〕。こうした「ナショナリスト史観」に対し、「科学的」な歴史学的手法を用いてそれまでの歴史を再解釈・再評価するという意味での「修正主義」は、ムーディ（T. W. Moody）、エドワーズ（R. D. Edwards）らによってすでに1930年代に始められていたが、それはあくまでも研究者による学問という限定された場での議論であり、社会的には大きな影響を持たなかった。しかし、ナショナリズムと暴力とが密接に結びついた北アイルランド紛争の開始によって、歴史家は暴力の正当化につながるようなナショナリスト史観における「神話」との対決を迫られ、その政治的立場、役割を問われることになったのである。

アイルランド自由国および共和国の建国のイデオロギーを、排除すべき神話とみなす「修正主義者」に対し、「ナショナリスト」からは当然のごとく強い反発が起こった*9。反論は歴史学のディシプリンを超えたさまざまな分野から行われただけでなく、問題がアイルランドにおける歴史認識やナショナル・アイデンティティに関わるものでもあったため、1970年代から90年代初めにかけて、修正主義論争は学問的な場

を超えて展開されていった。

この論争を「修正主義者」と「ナショナリスト」の対立として単純にとらえてしまうことは難しい。アイルランドの人びとが北アイルランド紛争という事態に対してどのように政治的に関わるのか、また、IRAなどの暴力を正当化する「ナショナリスト史観」をいかに否定するかという課題において、修正主義の主張やそれに対する反論にはさまざまなバリエーションが生じるからである。そこでは誰が「修正主義者」であり、誰が「ナショナリスト」であるかは、判断基準をどこに設けるかによって変わってくる。例えば、修正主義においてなされた、北アイルランドも視野に入れた「アイルランドにおける多様な文化の存在の承認」という主張は、アイルランドの南北分断の是認というユニオニストの主張と重なるものであるが、他方では、多文化を内包するアイルランドの再定義という観点から、ナショナリズムの概念と相反しないものにもなる。また、アイルランド史における、より「科学的」な記述の必要性の主張は、必ずしも、北アイルランド紛争をきっかけとした学問の政治への積極的関わりへの肯定に結びつくものばかりではなかった。しかし、論争においては、「ナショナリスト史観」を修正しようとするものはみな「修正主義者」であり、すなわち「反・ナショナリスト」であるとみなされた*10。

以上のことからわかるように、北アイルランド紛争は、アイルランドにおける学

* 9 ここでの「修正主義者」の歴史家の代表としてはムーディ、ライオンズ（F. S. L. Lyons）、フォスター（Roy Foster）、「ナショナリスト」の歴史家の代表としては、フェンネル（Desmond Fennell）、ブラッドショー（B. Bradshaw）が挙げられる。

問と政治の関係や、誰が、誰に向かって問いかけるのかという研究者の発話の位置を激しく揺さぶるものであった。このことは後にみるように北アイルランド研究の変容にも大きな影響を与えることになる*11。

また、北アイルランド紛争は、北アイルランドにおける人びとのナショナル・アイデンティティにも重大な影響をもたらした。北アイルランドの帰属、すなわち、ナショナル・アイデンティティをめぐる葛藤は、北アイルランド問題を構成する重要な要素であり、例えば宗派とナショナル・アイデンティティの相互関係については、これまでにいくつかの研究が行われてきている。それらの調査結果を参照すると、紛争が始まる直前の1968年では、プロテスタントの約4割が自らを British、約2割が自らを Irish であると認識していたのに対し、10年後の1978年では、その割合が、それぞれ7割弱と1割弱に変化している [Moxon-Browne 1991: 25]。また、紛争の日常化にともなって、プロテスタント=British、カトリック=Irish という二極化がすすむ

一方、1986年には、新たに Northern Irish という項目が設けられ、プロテスタント、カトリックともに全体の2割程度を占めるようになった。こうしたナショナル・アイデンティティ調査にみる変遷は、まさに、北アイルランド紛争という緊張した状況が、人びとのナショナル・アイデンティティをつくりあげ、強化していったことを示している*12。

II. 北アイルランド問題研究の転換—対立の構図と研究の視角

北アイルランド紛争の開始と長期化は、暴力と結びついたナショナリズムの問題を顕在化させるとともに、北アイルランド研究の飛躍的增加を促した。その数は、1990年までの時点で7000点を超過しており、当然、現在ではさらなる増加が予想される。では、これらの膨大な研究において、北アイルランドはどのような「場」としてとらえられてきたのだろうか。

個々の研究者が北アイルランドにおける対立の構図をどのようにとらえているか、

*10 以上のことからわかるように、アイルランドにおける修正主義論争は、アイルランドが植民地支配を受けた側であるという点で、近年のドイツ、フランス、日本における「歴史修正主義」とはまた異なる枠組みを持っているといえる。この点での比較対象としては、韓国における修正主義の考察 (尹 [1998]) が興味深い。

*11 日本におけるアイルランド研究としては、堀越 [1970, 1979, 1981, 1985a, 1985b.], 堀越ほか [1981], 上野 [1982, 1992], 松尾 [1980, 1994], 安川 [1993], 小関 [1993], 高神 [1999], 森 [1999], 小関ほか [1999] などが挙げられる。詳細な研究史整理については、戦前の日本におけるアイルランドへの関心を明らかにした上野 [1975a, 1975b, 1976], 比較的最近の研究までを含めたものとして高橋 (純) [1997] を参照のこと。矢内原忠雄のアイルランド論を詳細に論じたものとしては、斉藤 [1999] がある。北アイルランド研究としては、堀越 [1983], 松尾 [1980], 分田 [1996] などが挙げられる。ところで、アイルランドにおける修正主義論争をふまえるなら、これらの研究においてもやはり、直接の当事者ではない外部の観察者として、どのように「アイルランド問題」および「北アイルランド問題」をとらえるかという発話の位置が問われることになるのはいうまでもない。

*12 ナショナル・アイデンティティ調査は、人々の「実体的な」状況を示すものというよりも、そうした調査を通じて人々の認識をつくりだすものとしてとらえられるべきであると同時に、そこでの数字がその時の社会状況との関わりで何を表しているかが考えられなければならない。例えば、紛争下の北アイルランドでは、「無回答」や、実際とは異なる回答をよりひきだしやすい [Whyte 1990: 4]。

つまり北アイルランド問題をどのような枠組みで見ているかに注目したホワイト (John Whyte)^{*13}によれば、北アイルランド研究は以下の4つに分類される。すなわち、対立軸を(1)ブリテン対アイルランドとする「伝統的」ナショナリストの解釈、(2)南アイルランド対北アイルランドとする「伝統的」ユニオニストの解釈、(3)資本家対労働者とするマルクシストの解釈、(4)北アイルランドにおけるプロテスタント対カトリックとするコミュニティ/内紛研究者による解釈である^{*14}。ここでは、北アイルランドという「場」を考える手がかりとして、これらのホワイトの定義による4つの北アイルランド問題解釈を用いながら、北アイルランド研究としてどのような問題が存在し、それがどのように転換してきたのかを考察する。

1. 「伝統的」^{*15} 解釈

「伝統的」ナショナリストの解釈は、北アイルランド問題をブリテンとアイルランドの対立とみなすものである。ここでの代表的な主張は、アイルランドの人びとはひとつのネーションを形成し、また、アイルランド分断の責任はブリテンにあるというものである。したがって、本来ならば「ひ

とつのネーション」の一員であるはずのユニオニストのアイルランド統一への抵抗は、イギリスによって人為的につくられたものであり、イギリスがユニオニストを扇動しなければ、双方の妥協は可能だったはずであると見なされる^{*16}。この「伝統的」ナショナリストの解釈は、北アイルランド成立の時期に起源を持つが、前述の修正主義論争における「ナショナリスト史観」にも連なるものであるといえるだろう。

一方、「伝統的」ユニオニストの解釈は、北アイルランド問題を(ナショナリストの)南アイルランドと(ユニオニストの)北アイルランドの対立とみなす。ここでの主張は、アイルランドにはユニオニストとナショナリスト(あるいはプロテスタントとカトリック)という二種類の人びとがあり、北アイルランド問題の中心は、ナショナリストがこの事実を認識せず、また彼ら同様の自決権をユニオニストに許容しないことにあるというものである。イギリスに北アイルランド問題の責任を求めるナショナリストの解釈とは異なり、ユニオニストにとってのイギリスは、ナショナリストにあまりにも簡単に屈服してしまいがちな、「信頼のおけない同盟者」となる。こうした見方も、「伝統的」ナショナリストと同

*13 ホワイトの代表的著作である Whyte [1990] は三部から成り、第一部では北アイルランドにおけるコミュニティ分断の宗教・経済・政治・心理的特徴の考察、第二部では、先行研究の整理と分析、第三部では、これまで提示されてきた北アイルランド問題の様々な「解決策」に対する評価と今後の北アイルランド研究への提言がおこなわれている。

*14 もちろん、このうちのひとつのみを対立の構図として掲げる研究者はおらず、ほとんどが少なくとも二つ、多くが三つを受け入れており、また全てが存在すると見ることも不可能ではないという注釈が加えられている。

*15 ここでの「伝統的」という言葉は、紛争が始まる以前の北アイルランド問題認識を指しており、(アイルランド統一、あるいは、イギリスとの連合維持を主張しつつも紛争の核心は北アイルランドにおける二つのコミュニティ間関係にあると考える)「今日」におけるナショナリスト、ユニオニストは、4番目のカテゴリーに入ることになる [Whyte 1990: 114-115]。

*16 「伝統的」ナショナリスト解釈による代表的研究としては、Harrison [1939] などが挙げられる。

様に、北アイルランド成立時に起源を持つものである*17。

以上の二つに対し、マルクシストの解釈は、北アイルランド問題を資本家対労働者の対立としてみるものである。マルクシストにとって、労働者の資本家に対する闘争は国家独立にむけての闘争であり、プロテスタントとカトリックの争いはアイルランド自治の達成によって消滅すると考えられてきた。反対に、アイルランドの分断は、階級問題のかわりにナショナルな問題を持続させ、アイルランドにおける労働者階級の調和を破壊するものとされた*18。アイルランド分断によって北アイルランドが成立した後は、北アイルランドの資本家階級が労働者階級を抑圧してプロテスタントとカトリックを分離させ、宗派間の対立を煽ったり、待遇の差をもうけるという手段によって、両者の連帯を妨げているという主張がなされた [Whyte 1990: 179-182]。

2. 「紛争」以降の解釈

しかし、これらの「伝統的」ナショナリスト、「伝統的」ユニオニスト、(「伝統

的」) マルクシストによる北アイルランド問題認識は、1968年以降の北アイルランド紛争の激化にともない、イギリス・アイルランド両者の責任を問いながらも、問題の所在を北アイルランド内部に求める方向へ修正せざるをえなくなっていく。

「伝統的」ナショナリストの解釈においては、プロテスタントの非妥協的態度がイギリスの陰謀によるものだという見解は、紛争開始後に顕著になったイギリス政府の北アイルランド政策やアイルランド統一に対するプロテスタントの一連の抵抗によって、一層論じ難いものへとなくなっていった*19。アイルランド分断を引き起こした原因の標的は「イギリス」から「北アイルランドのプロテスタント」へと移り、ユニオニストの態度の解明の研究などに関心が注がれるようになった*20。

同様に、「伝統的」ユニオニストの解釈においても、北アイルランド問題の原因が南アイルランドの分断終焉の要求にあるとみることが困難になり、議論の対象は、「南の政府・人びと」から「北のカトリック」へと移った*21。そうしたなかで、こ

*17 Heslinga [1979] は、ユニオニストの観点をわかりやすく説明している。また、Kennedy [1988] は、アルスター・ユニオニストにとっての南アイルランドからの脅威を時代的に分析している。

*18 アイルランド問題のマルクシスト的解釈は、アイルランド独立運動家のコノリー (James Connolly 1870-1916) の思想に代表される。マルクス・エンゲルスのアイルランド問題についての論稿は Marx & Engels [1971] にまとめられている。なお、マルクスとエンゲルスの認識の違いについては、安川 [1993] 第8章を参照のこと。

*19 もはや北アイルランド問題を学問的に記述しようとしている研究者で one nation の理論に立つ者はおらず、アイルランド統一の最大の障害は、アルスタープロテスタントコミュニティにあると考えるが、だからといってイギリスの責任問題が問われなくなったというわけではない [Whyte 1990: 141]。

*20 ナショナリストの観点からのアルスターにおけるユニオニスト・イデオロギーの先駆的研究として、Miller [1978] がある。

*21 代表的研究として Stewart [1977, 1989, 1993] がある。「伝統的」ユニオニストの見解は、紛争による影響はあるものの、ナショナリストのそれに比べれば堅固に生き続けているといわれる。この理由として、ユニオニストが「囲い込まれたコミュニティ (community under siege)」というプレッシャーにさらされているため、その態度を変えるのがより困難であるという見方、また、統一アイルランドへの警戒などが挙げられる [Whyte 1990: 148]。

れまで「伝統的」ナショナリストの解釈が軽視してきた点である、北アイルランドのプロテスタントが自らをアイルランド共和国とは別個の単位としてみなす理由、すなわちユニオニストが北アイルランドの国境を維持したいと主張する根拠が、宗教的、民族的、経済的側面などから論じられた。また、ユニオニスト支配体制の研究^{*22}や、共和国内のプロテスタントの問題も広く扱われるようになった。

「伝統的」マルクシストの解釈においても、プロテスタント労働者はユニオニストのイデオロギーを本当に信じているのではなく資本家やイギリス人によって騙されているのだとするマルクシストやナショナリストを安心させる理論は、カトリックを中心とした公民権運動や IRA キャンペーンに対するユニオニスト労働者の憤激を目の当たりにして、信じ難いものになっていった。代わって、さまざまな角度からの研究が行われるようになったが^{*23}、なかには、北アイルランドにおける労働者階級の分断は、北のカトリックの北アイルランド「国家」受け入れ反対を南アイルランドのカトリック・ナショナリストの資本家が鼓舞したためであるという、まったく正反対の結論を導き出したものもある^{*24}。「修正主義」マ

ルクシストの解釈は、コノリーに代表されるような「伝統的」マルクス主義解釈への批判的姿勢という点では共通するものの、オルタナティブにおいての合意がなく、マルクス主義学派における北アイルランドをめぐる見解の統一性は1970年代に失われていった [Whyte 1990: 187]。

このように、それまで支配的だった解釈が、紛争という「現状」において変容を迫られるなかで登場してきたのが、北アイルランド問題を北アイルランド内部におけるプロテスタント対カトリックの対立とみならず、内紛 (internal-conflict) およびコミュニティ研究者の解釈である。ここでは、それまでの「伝統的」解釈と比較して外的要因よりも内的要因が強調されており、北アイルランドにおけるコミュニティ間の関係、教育、住宅・雇用における差別、グリマンダリング、暴力と治安などをめぐってさまざまな研究が行われ、差別や対立の解消、コミュニティの共存・融和が模索された^{*25}。

こうして、1970年代初めまで支配的な位置を占めていた「伝統的」な北アイルランド問題解釈は、1970年代におけるマルクス主義の再興とともに、マルクシスト的解釈に次第に取って代わられ、1980年代以降は、

*22 代表的研究として Bew, Gibbon, Patterson [1979], Wilson [1989] などがある。

*23 Nairn [1977, 1981], Probert [1978], Bew, Gibbon, Patterson [1979] などがある。

*24 「修正主義」マルクシスト解釈の先駆者である British and Irish Communist Organisation (BICO) によるもの。BICO は1969年の時点では伝統的マルクス主義のポジションにいたが、1969年から72年にかけて伝統的解釈から大きく移行して正反対の見解を示すにいった。コノリーのマルクス主義が共産主義的ナショナリズムならば、BICO のマルクス主義は、共産主義的ユニオニズムとみなしうる [Whyte 1990: 182-4]。

*25 「内紛」解釈による先駆的研究としては、Barritt & Carter [1962, 1972], その他に, Calvert [1972], Heskin [1980], Hickey [1984], Bruce [1986], Wright [1987], Boyle & Hadden [1994] などがある。ここで注意しておきたいのは、紛争を北アイルランドにおける「内紛」とみることが、北アイルランド問題を構成する他の外的要因を全く無視することではないという点である。しかし、どの程度外的要因を考慮するかで「内紛」解釈は大きな幅を持つものとなる。

北アイルランド内部に焦点をあてた「内紛」解釈にもとづく研究が、ホワイトがいうところの今日の北アイルランド研究における「支配的パラダイム」になったのである。

3. 近年の研究

このホワイトの北アイルランド研究の考察は、4つのカテゴリーの妥当性や、彼が提示する北アイルランド紛争の「解決策」への疑問などいくつかの批判があるものの*26、間違いなく今日北アイルランド研究を行う者にとってのひとつの参照軸になっている。ホワイトの研究を通過したうえで、いかなる問題提起にもとづいて新たな解釈を提示するかという課題が、個々の研究者に問われているといえるだろう。

Interpreting Northern Ireland 出版以降の代表的な北アイルランド研究としては、O'Leary and McGarry [1990, 1993, 1995], Bew, et al. [1995, 1996], Ruane and Todd [1996] などが挙げられる。民族紛争研究の専門家であるオーレイリー (Brendan O'Leary) とマクガリー (John McGarry) は、北アイルランド紛争のイメージの単純化・固定化、あるいはそれをそもそも「理解不可能なもの」とする見方に異議を唱え、外在的 (ナショナリスト, ユニオニスト, マルクシスト), および内在的 (宗派, 文化, 経済) 観点からの紛争解釈を批判的に

考察し、他の民族対立・民族紛争との比較の有効性を主張している。「修正主義」マルクシストのビュー (Paul Bew), ギボン (Peter Gibbon), パターソン (Henry Patterson) は、1921年から現在にいたるまでの北アイルランド社会の歴史的過程を、特にアルスター・ユニオニスト党の一角支配体制とイギリス政府との関わりにおいて論じている。人類学者のルアン (Joseph Ruane) と政治学者のトッド (Jennifer Todd) は、北アイルランドにおける歴史的過程, コミュニティの相互関係, イデオロギー, 政治, 経済, 文化を, より広いイギリス, アイルランド, 国際的な文脈において分析する必要性を唱え, そうしたなかから, 北アイルランド紛争の解決策として, 北アイルランドにおける関係性のシステムを解体するものとしての「解放のためのアプローチ (emancipatory approach)」を提案している。オーレイリーとマクガリー, ルアンとトッドは, ホワイトが1980年代以降の北アイルランド研究における「支配的パラダイム」とよんだ「内紛」解釈を, イギリス, アイルランド, アメリカなどにとって問題を自らのものとして考えずにすむ都合のよい見方であると指摘し [O'Leary and McGarry 1995: 326; Ruane and Todd 1996: 6-7], 北アイルランド問題を広範な視野から位置づけることで, 研究の方向性をより豊かなものにしていくといえ

*26 ホワイトは、「今後の研究が向かう最も有望な方向は、内紛解釈がその有効性を長続きさせることであり、また、新たなパラダイムが姿を現しつつありさえすること」とし、北アイルランドにおける各地域の多様性に注目するものとして自ら 'different political arrangements for different areas' というアプローチを提示している [Whyte 1990: 243, 259]。これに対して、「ユニオニスト, ナショナリストは、ホワイトの localist アプローチを、アイルランドの民族統一主義や、イギリスの北アイルランドにおける多数決主義的な保証および管理するものとしての役割という避けがたい外的要因を見くびる試みだとみなすだろう」という批判がある [Power 1994: 248]。

るだろう。

このように北アイルランド研究をながめてみるなら、ホワイトの提示した4つの解釈とは別に、大きな軸として次のふたつが浮かび上がってくる。第一は、北アイルランド問題を構成するものとして、外的要因と内的要因のどちらを重視するかである。個々の研究者の問題関心との関わりからどちらにより強調をおくかによって、さまざまなバリエーションが生じる。第二は、北アイルランド問題／北アイルランド紛争に対する研究者の政治的立場、つまり、紛争の具体的な解決策を提示しようとするものであるかどうか、また、そもそも解決策があるとみるかどうかである。ホワイトは、これまでなされてきた膨大な量におよぶ北アイルランド研究は、現実的な解決にほとんど役立ってこなかったとしながらも、決して「解決策はない」とするのではなく、どんな方法でも北アイルランドに平和をもたらすものであればそれを支持すると述べている [Whyte 1990: 254, x]。これに対して、ホワイトの4番目のカテゴリーに分類されたダービー (John Darby) は、「紛争を解く鍵はそれを解決しようとし不在にある」とし、他の紛争や対立を抱える社会との比較研究の必要性を説いている [Darby 1991: 122]。

III. 北アイルランドという「場」 —緊張する「周縁」

以上みてきたように、北アイルランド研究は1960年代末に始まった紛争をきっかけに量・質ともに増大し、研究の枠組みや焦点も転換してきた。北アイルランド問題／北アイルランド紛争は、「和平合意」にむけての度重なる困難さをも、北アイルランドに特有のプロテスタント対カトリックの対立、といった側面のみではもはやとらえきれない諸相を抱えている。こうした状況において、紛争を「解決」しようとする具体的な試みとはまた別の角度から、北アイルランドという「場」をどのように考え、問題のありかを提示できるのかという視点が必要となるだろう。

アイルランドおよびイギリスにとっての「周縁」である北アイルランドは、紛争を頂点とする緊張状態に置かれ続けることで、内包する諸問題を先鋭的に浮かび上がらせる。なかでも、北アイルランドにおけるアイデンティティの問題の重要性は、北アイルランド問題をアイデンティティの衝突や葛藤という側面からとらえる研究の増加に顕著にあらわれているといえる^{*27}。これらの研究成果をいかに分節化し、くみかえていくかは、北アイルランドという「場」を、北アイルランドが抱える固有の問題の舞台としてだけでなく、広く植民地主義や帝国主義、民族問題といった近代国民

*27 北アイルランドにおけるアイデンティティを問題にした研究では、ふたつのコミュニティがともにマイノリティであるとする「ダブル・マイノリティ」、カトリックはアイルランド全島において、プロテスタントは北アイルランドにおいてともにマジョリティであるとする「ダブル・マジョリティ」、カトリックは北アイルランドにおいて、プロテスタントはアイルランド全島および連合王国においてマイノリティであるとする「トリプル・マイノリティ」など、これまでいくつものモデルが提示されている [Whyte 1990: 100-101]。

家が抱える共通の問題との結節点とするうえで、重要な作業であるといえる。ここでは、II章でみた北アイルランド問題の解釈を、あらためてナショナル・アイデンティティをめぐる問題という観点から考察し、ナショナル・アイデンティティ研究の「場」としての北アイルランドについて考えてみたい。

1. 北アイルランド研究の枠組みと ナショナル・アイデンティティ

先に見たように、「伝統的」ナショナリストの解釈は、アイルランドの人びとを「ひとつのネーション」とみなすため、カトリックとは異なるプロテスタントのアイデンティティや彼らのアイルランド統一への反発が十分に説明できない。また、「伝統的」ユニオニストの解釈は、北アイルランドをプロテスタント住民から成る均質な社会とみなすため、マイノリティであるカトリック住民の存在および彼らのアイデンティティの主張を無視することになってしまい、北アイルランドにおけるカトリックとプロテスタントの対立が説明できない。

このような「伝統的」ナショナリストと「伝統的」ユニオニストの解釈は、互いを北アイルランド問題の最大の要因とみなす、対立しあう非妥協的な解釈であるようにみえるが、ひとつの共通点をそなえている。それは、両者が「相反するようになって実は『民族自決の原則』という同じパラダイム上の理論」[Whyte 1990: 172] だという点である。つまり、「伝統的」ナショナリストは、アイルランドにおける「ひとつの」ネーションを、「伝統的」ユニオニストは、北アイルランド（あるいはブリテン

の一部としての北アイルランド）における「ひとつの」ネーションを主張しているのである。こうした主張は、研究の枠組みとしてはさまざまな限界を含んではいるものの、北アイルランド紛争において中心的役割を果たしている両派の急進的軍事組織の「北アイルランド問題」認識に通じるものであり、また、北アイルランドの人びとの日常においても、まだなお根強く浸透している認識であるといえるだろう。このイギリス対アイルランドという二項対立な枠組みは、従来の「アイルランド問題」の延長線上にあり、この意味で「北アイルランド問題」は「アイルランド問題」をいまなお引き継いでいる。

一方、ホワイトが研究の方向性として高く評価した「内紛」解釈は、「伝統的」解釈の限界をふまえ、北アイルランド問題を北アイルランド内部におけるユニオニスト／ナショナリスト（プロテスタント／カトリック）の両コミュニティの対立の問題として位置づけた。ここでは、紛争という日常化した暴力を前にして、そのような現実にはいかに対処しようかという問題関心から、「北アイルランド人 (Northern Irish)」という新たなナショナル・アイデンティティの創造が対立を乗り越えるものとして提唱され [Barritt 1982: 20-21]、ナショナル・アイデンティティの調査でも少しずつ数字を伸ばしている。しかし、ふたつのコミュニティの平和的共存を志向する「北アイルランド」としての新しいアイデンティティの模索は、新たなナショナリズムの創造、すなわちナショナリズムの再生産という側面をまぬがれえない。「北アイルランド人」として境界を設定し、人びとを排

除／包摂、あるいは内部の多様性を捨象してしまうことは、結局のところ、枠組みとしては「伝統的」ナショナリストおよび「伝統的」ユニオニストと同じ構造を抱えてしまうことになる。北アイルランド問題の「伝統的」解釈の限界は、ここでも名前を変えた「ひとつの」ネーションを志向するものとして浮かび上がる。

2. 「アイルランド問題」と「北アイルランド問題」の連続性と非連続性

では、こうしたナショナル・アイデンティティをめぐる解釈の限界から、北アイルランドという「場」についてどのようなことがいえるのだろうか。ここで、冒頭で述べた「アイルランド問題」と「北アイルランド問題」のずれについて再び考えてみたい。両者が異なる様相を含んだものであるならば、そこに注目することで見えてくるものとは何だろうか。

「アイルランド問題」と「北アイルランド問題」は、問題のそもそものはじまりが、イングランド／ブリテンのアイルランド支配に根ざしているということ、つまり、「アイルランド問題」も「北アイルランド問題」も「イギリス問題」なのであり、イングランド／ブリテンとの関係性において問題をとらえる必要がある点において、連続性をそなえているといえる。

しかし一方で、「アイルランド問題」が、イギリス対アイルランドという二項対立的枠組みにおいて、問題の解決策として「自治」「独立」を志向し、それを「実現」させた national question であったのに対し、「北アイルランド問題」は、「伝統的」ナショナリストと「伝統的」ユニオニストによ

る解釈の限界をみてもわかるように、「自治」「独立」といったナショナル・アイデンティティの確立が「解決」とならない状況にまさに直面し続けてきたのである。

言い換えるなら、「アイルランド問題」と「北アイルランド問題」の非連続性は、「イギリス対アイルランド」から「北アイルランド内部のカトリック対プロテスタント」という対立軸の移行にみいだせるのではなく、むしろ、「アイルランド問題」がすでに含んでいた「アイルランドにおけるネーションとは誰か？」という問題、また「そもそもネーションとは、ナショナリズムとは何か」という最も厄介な問いが、「北アイルランド問題」に凝縮されている点にあるのだ。これこそ、「アイルランド問題」が「北アイルランド問題」というかたちで切り離し、また、現在のアイルランド共和国がおきざりにしてきた問題であるといえるだろう。それゆえ、アイルランドが「ポスト・ナショナリズム」を掲げる時、それが意味するものは、北アイルランド問題にとっての「ポスト」とは必然的に異なってくるはずである。こうして見るなら、北アイルランドは、世界各地における「民族紛争」のひとつの「場」であると同時に、そもそも何をもってナショナル・アイデンティティが「確立」されたことになるのか、またどのようにそれが問題の「解決」となりうるのかについて、根源的な問いを投げかける「場」でもある。

「北アイルランド問題」にとって20年以上におよぶ紛争状況は、ナショナル・アイデンティティをめぐる葛藤を人びとの日常と隣り合わせのものにしてきた。北アイルランドにおける紛争は、それが20年以上に

わたって続いてきたことからわかるように、全土的に武力闘争が展開されるといったものではない。もちろん時期や地域による差はあるものの、ごく普通の日常生活が、過激派による無作為の爆発事件や軍事組織同士の激しい応酬、あるいは警察との衝突などと一瞬にして入れ替わるのである。一見「平和」にみえる日常のそこかしこにひそんだステレオタイプ、差別、対立意識が、何らかの政治的な出来事をきっかけに噴出する。そこでは、「確固」たるナショナル・アイデンティティの主張が対立をつくりだし紛争を長期化させる要因となる一方で、そのような状況において自らを保証する「確固」としたアイデンティティが切実に求められる。

問題と主体との関係が緊張をともなって問われるこうした「場」においては、ナショナル・アイデンティティをめぐるさまざまな政治的言説の有効性が常に挑戦にさらされているといえるだろう。「アイルランド問題」との連続性を簡単に忘却することなく、しかし、その非連続性における問題をいかに現実の状況と関わらせながら乗り越えていけるかが、北アイルランドにとっての困難な、しかし避けて通ることのできない課題である。

おわりに

本稿では、北アイルランド研究の転換の考察を通して、ナショナル・アイデンティティとの関わりから北アイルランド問題をどのようにとらえることができるかについて論じてきた。繰り返すなら、「北アイルランド問題」は、イギリスによるアイルランド植民地支配の歴史に端を発するという

「アイルランド問題」との連続性を持ちつつも、「北アイルランド」としてアイルランド・イギリスの両方から切り離されたその位置性において、従来のアイルランド対イギリスという構図ではもはやとらえきれない問題を抱えている。これは、北アイルランドという国民国家の「周縁」における問題が、長期化する北アイルランド紛争によって転換させられてきたとみることができ一方、転換ではなく、そもそもはじめから抱えていた問題が緊張状態の下で先鋭化された結果とみることでもできる。こうした状況におけるナショナル・アイデンティティの保証をめぐる恐怖や不安が、北アイルランドにおいて支配的な位置を占めてきたユニオニストの側に如実にあらわれているというのは興味深い。

「北アイルランド問題」の持つ「アイルランド問題」との連続性と非連続性を、植民地主義によってもたらされた国民国家の「周縁」における、人びととナショナル・アイデンティティの緊張関係に着目する枠組みにおいてとらえることには、大きな意義があると思われる。ここで問題の核心となるのは、ナショナル・アイデンティティがどのようにつくられてきたのか、また、それをこれからどのようにつくっていくのか、あるいは、どのように乗り越えていくのかということではなく、人びとにとってのナショナル・アイデンティティの役割と意味を維持し続けてきたものは何なのかを探ることである。それは同時に、こうしたナショナル・アイデンティティをめぐる問いを、どのような位置から、誰に向けて語ることができるのかを、北アイルランドという「場」を通して、私たちに突きつけるもの

でもある。

参考文献

- Arthur, Paul and Keith Jeffery
 1988 *Northern Ireland since 1968*. Oxford: Basil Blackwell.
- Barritt, Denis
 1982 A Case of Identity: Who are the People of Northern Ireland?. In Denis Barritt, *Northern Ireland: A problem to Every Solution*. London: Quaker Peace & Service.
- Barritt, Denis and Charles Carter
 1962 *Northern Ireland Problem: A Study in Group Relations*. 1st ed. Oxford: Oxford University Press.
 1972 *Northern Ireland Problem: A Study in Group Relations*. 2nd ed. Oxford: Oxford University Press.
- Bew, Paul, Peter Gibbon and Henry Patterson
 1979 *The State in Northern Ireland 1921-1972: Political Forces and Social Classes*. Manchester: Manchester University Press.
 1995 *Northern Ireland 1921-1994: Political Forces and Social Classes*. London: Serif.
 1996 *Northern Ireland 1921-1996: Political Forces and Social Classes*. London: Serif.
- Boyce, D. G. and Alan O'Day, eds.
 1996 *The Making of Modern Irish History: Revisionism and the Revisionist Controversy*. London: Routledge.
- Boyle, Kevin and Tom Hadden
 1994 *Northern Ireland: The Choice*. Harmondsworth: Penguin.
- Brady, C. ed.
 1994 *Interpreting Irish History: the Debate on Historical Revisionism*. Dublin: Irish Academic Press.
- Bruce, Steve
 1986 *God Save Ulster: the Religion and Politics of Paisleyism*. Oxford: Oxford University Press.
- 分田順子
 1996 「北アイルランドにおける宗派・教育・雇用 (1) 雇用慣行と宗派間・宗派内社会関係」『都留文科大学研究紀要』44:155-169.
- Calvert, Harry
 1972 *The Northern Ireland Problem*. London: The United Nations Association.
- Coulter, Colin
 1994 The Character of Unionism, *Irish Political Studies* 9: 1-24
- Darby, John
 1991 Ideological Shifts, *The Irish Review* No.10, Spring: 118-122.
- Hainsworth, Paul
 1998 *Divided Society: Ethnic Minorities and Racism in Northern Ireland*. London: Pluto Press.
- Harrison, Henry
 1939 *Ulster and the British Empire 1939: Help or Hindrance?*. London: Robert Hale.
- Heskin, Ken
 1980 *Northern Ireland: A Psychological Analysis*. Dublin: Gill and Macmillan.
- Heslinga, M. W.
 1979 *The Irish Border as a Cultural Divide*. Assen: van Gorcum.
- Hickey, John
 1984 *Religion and the Northern Ireland Problem*. Dublin: Gill and Macmillan.
- 堀越智
 1970 『アイルランドの反乱』三省堂。

- 1979 『アイルランド民族運動の歴史』三省堂。
1983 『北アイルランド紛争の歴史』論創社。
1985a 『アイルランド独立戦争1919-21』論創社。
1985b 『アイルランドイースター蜂起1916』論創社。
堀越智・竹本洋・本多三郎・市川勇・松尾太郎・高橋裕之編
1981 『アイルランドナショナリズムの歴史的研究』論創社。
勝田俊輔
1998 「『共同体の記憶』と『修正主義の歴史学』—新しいアイルランド史像の構築に向けて」
『史学雑誌』107 (9): 80-95。
Kennedy, Dennis
1988 *The Widening Gulf: Northern Attitudes to the Independent Irish State*. Belfast: Blackstaff.
小関隆
1993 『一八四八年：チャーティズムとアイルランド・ナショナリズム』未来社。
小関隆・勝田俊輔・高神信一・森ありさ
1999 「アイルランド近現代史におけるナショナリズムと共和主義の「伝統」」
『歴史学研究』726: 22-33。
Marx, Karl and Frederick Engels.
1971 *Ireland and the Irish Question*. London: Progress Publishers.
松尾太郎
1980 『アイルランド問題の史的構造』論創社。
1994 『アイルランド民族のロマンと反逆』論創社。
McGarry, John and Brendan O'Leary
1990 *The Future of Northern Ireland*. Oxford: Clarendon Press.
1993 *The Politics of Antagonism*. London: The Athlone Press.
1995 *Explaining Northern Ireland: Broken Images*. Oxford: Basil Blackwell.
Miller, David
1978 *Queen's Rebels: Ulster Loyalism in Historical Perspective*. Dublin: Gill and Macmillan.
森ありさ
1999 『アイルランド独立運動史』論創社。
Moxon-Browne, Edward
1991 National identity in Northern Ireland. In Stringer, P. and G. Robinson, eds., *Social Attitudes in Northern Ireland*. Belfast: Blackstaff Press, pp. 23-30
Nairn, Tom
1977 *The Break-Up of Britain: Crisis and Neo-Nationalism*. London: NLD
1981 *The Break-Up of Britain: Crisis and Neo-Nationalism*. 2nd expanded ed. London: NLD and Verso.
Nelson, Sarah
1984 *Ulster's Uncertain Defenders: Protestant Political, Paramilitary and Community Groups and the Northern Ireland Conflict*. Belfast: Appletree Press.
박지향(朴枝香)
2000 「아일랜드 역사서설: 민족주의와 수정주의를 넘어서」『역사비평』50호
2000년봄, 서울: 역사문제연구소 (『アイルランドの歴史叙述: 民族主義と修正主義をこえて』『歴史批評』50号, 2000年春, ソウル: 歴史問題研究所)。
Power, Paul F
1994 The Anglo-Irish Problem-A Matter of Which Question, *Comparative Politics* 26 (2): 237-250.
Probert, Belinda
1978 *Beyond Orange and Green: The Political Economy of the Northern Ireland Crisis*. Dublin: The Academy Press.
Ruane, Joseph and Jennifer Todd
1997 *The Dynamics of Conflict in Northern Ireland: Power, Conflict and Emancipation*.

Cambridge : Cambridge University Press.

斉藤英里

- 1999 「矢内原忠雄とアイルランドー周辺からみた植民学」中村勝己編著『歴史のなかの現代ー西洋・アジア・日本』ミネルヴァ書房, 257-283。

Stewart, A. T. Q.

- 1977 *The Narrow Ground : Aspects of Ulster, 1609-1969*. London : Faber & Faber.
 1989 *The Narrow Ground : the Roots of Conflict in Ulster*. revised ed. London : Faber & Faber.
 1993 *The Narrow Ground : the Roots of Conflict in Ulster*. Aldershot : Gregg Revivals.

高神信一

- 1998 「アイルランド民族運動史の研究動向ー修正主義歴史家とフィーニアン運動」『歴史学研究』709 : 35-44。
 1999 『大英帝国のなかの「反乱」ーアイルランドのフィーニアンたち』同文館出版。

高橋純一

- 1997 『アイルランド土地政策史』社会評論社。

上野格

- 1975a 「戦前のわが国における、アイアランド史研究文献について (一)」成城大学『経済研究』49 : 61-81。
 1975b 「日本におけるアイアランド学の歴史」『思想』617 : 126-145。
 1976 「学界展望 アイアランド問題」経済学史学会『年報』14 : 1-11。
 1982 「イギリス史におけるアイルランド」青山吉信・今井宏編『概説イギリス史』有斐閣, 259-287。
 1992 「アイルランド」松浦高嶺『イギリス現代史』山川出版社, 291-350。

Whyte, John

- 1990 *Interpreting Northern Ireland*. Oxford : Oxford University Press.

Wilson, Thomas

- 1989 *Ulster conflict and Consent*. Oxford : Basil Blackwell.

Wright, Frank

- 1987 *Northern Ireland : A Comparative Analysis*. Dublin : Gill and Macmillan.

安川悦子

- 1993 『アイルランド問題と社会主義』御茶の水書房。

尹健次

- 1998 「韓国に「修正主義」はあるのかー韓国の近現代史研究と関連して」『歴史学研究』713 : 38-49。